

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	北西 諒介
論文題目	地名の使用とその機能に関する文化・社会地理学研究		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、地名にかかわる研究の検討を通して理論的課題を整理した上で、地名の生成と使用、再編について、文献資料とフィールド調査を組み合わせることで実証的に研究した論考である。</p> <p>序章では、合併に伴う新たな市町村名に関する論争など、地名の歴史的価値に社会的な関心が向けられてきたことを紹介し、関連する学術的な課題として、地名が使用される日常的な次元における地名の役割を解明することが必要であるとする、本論文を貫く問題意識を提示している。</p> <p>第1章では、地名研究の展望が行われている。地理学だけでなく、民俗学、言語学、歴史学など学際的に展開されてきた地名研究の蓄積を整理した上で、それらが総じて地名の語源にかかわる研究に集中する一方で、地名の使用については関心が低く実証的な研究があまり行われていないことを明らかにしている。また英語圏で近年展開される批判地名学は、場所の構築について地名を指標として検討を加える研究群であるが、その研究史上の意義を認めた上で、地名を対象としながら、地名それ自体に対する理論化の志向が不足していることを指摘する。こうした研究整理に基づいて、地名そのものを問う地名学の確立を目指して、地名の機能とその前提となる地名の意味とを解明するために、地名を起点として考察を進めるという研究枠組みを提示する。</p> <p>第2章では、ニュータウンにおける地名の命名と使用について、景観や地域社会との関係から検討している。大阪の千里ニュータウンの開発に際しては、開発主体と住民が新しい町を創り出すという認識をもつ中で、丘陵地の大規模な自然改変によって景観が一新されたことから、新たに多くの地名が案出された。その過程においては数字や樹木、抽象名詞が選好されるなど、命名に際して参照できる事物が限られていたことを指摘する。また新たな地名によって分節された空間が次第にその地名にそった景観になっていった例を挙げ、地名の使用が場所の形成に影響を与えたことを明らかにしている。さらに補論として多摩ニュータウンとの比較検討を行い、開発プロセスの違いを超えて、地名の命名原理にはいくつかの共通した類型が見い出されることから、開発地域の命名には一定の傾向があることを指摘している。</p> <p>第3章では、千里という地名が有する曖昧さがつくり出す関係性を考察している。千里をめぐる近世以来の用例をたどり、それがニュータウン開発以前から存在する地名であるものの、現在のように頻繁に使用されるようになるのはニュータウンの開発</p>			

を契機としたものであるとする。千里ニュータウンで自治会や市民フォーラムなどの地域活動に関わっている住民と行政に対して、「千里」という地名の意味について聞き取り調査を行い、それが空間的にはニュータウンの区域よりも広く捉えられるものであり、同時に曖昧さをもって認識されていることを明らかにしている。そしてその曖昧さが、地域活動に関心をもつ人々をひろく包含してまとめるという、結束の機能をもつと解釈できることから、多様な主体による多様な意味づけの重なり合う結節点として地名が機能すると結論している。

第4章では、高岡市で行われた住居表示に関する旧町名の復活を事例として、町名の位置づけとその変遷を検討している。町名は行政地名の中でもより身近な環境に関する知識を構成するものであり、町名が住民や行政にどのように捉えられてきたのかについて、新聞記事や行政資料の分析に加えて、復活にかかわったキーパーソンへの聞き取りを通して考察している。高岡市では、1960年代に住居表示の整備が実施されてから、町名としては住居表示町名と旧町名が併用されるようになり、前者が行政や郵便の領域で用いられる一方、後者は日常的なコミュニケーションや地縁組織の枠組みとなってきた。2010年代に実現された旧町名の復活の経緯をたどる中で、町名の復活への機運が必ずしも高いものではなかったことがわかり、それは地名の機能分担が安定していたためであり、住居表示町名の形式的な側面が明確になったとする。

終章では、残された課題の提示とともに、地名研究・地名学への本論文の貢献として、第1に地名がいかに使われているかという地名学的な課題に対して、住民の日常とかかわる地名の意味づけと新しい機能を具体的な事例を通して明らかにしたこと、第2に地名を単に指標として利用するだけでなく、機能に関する一般化を通して、地名そのものの分析可能性を拓いたことを挙げている。

(論文審査の結果の要旨)

地名と場所の関係をめぐる研究は学際的に展開され、多くの成果をあげてきた。そうした既往の研究の多くは、場所が地名にいかにか表象されているのかをめぐるのであり、命名の由来をめぐる地理学的・言語学的な研究や、地名を用いて景観の復原を行う歴史地理学的な研究として主に展開されてきた。これに対して本論文は、地名がいかにか使われているのかという問いを立て、その検討を通して地名が場所に対して与える影響を考察するという新しい研究領域を拓く意図をもつものであり、将来的に「地名学」の再構築をめざす意欲的な論考である。

その試みとしては、本論文はなお緒に就いたところと評すべきものであるが、具体的な実証レベルで提示された研究成果は、その可能性を十分に期待させるものである。また、批判地名学は英語圏の政治地理学において近年、研究が進展している領域であるが、地名によって場所を名指すことの政治性をめぐるとその議論について、なお地名を指標として利用するに止まるという本論文の批判は、申請者が目指している方向性をよく示していると言えよう。

こうした高い目標設定が本論文において上滑りすることがないのは、具体的な事例を通して研究が展開されているためである。とりわけ実証フィールドの選定が入念に行われている点が評価される。千里ニュータウンは、高度経済成長期の急速な都市化の新しい受け皿として開発されたニュータウンのモデルであり、丘陵地を大規模に改変して造成された広大な地域に対して、新たに数多くの地名をつける試行錯誤が繰り返されただけでなく、それらの地名の使用についての検討を行うために、創設から十分な時間がたった対象であるとみなされる。地名による空間の分節化が場所の形成に至ったとする重要な指摘は、このフィールドの特性を的確に読み取った結果という側面を有する。さらに千里ニュータウンから10年遅れて大規模な開発が行われた多摩ニュータウンと比較することで、フィールドの相対化を行ったことも、得られた知見の説明力を高めている。

また高岡市で2015年に実施された旧町名の復活は、金沢市で先行した取り組みを参照して行われたものであるが、高岡市における昭和30年代の住居表示が不均一に実施されたことが前提となり、フィールドには町名の二元性が様々な形をとって存在していた。このことが旧町名の復活が実施された町、実施できなかった町、あるいは取り組みさえ行われなかった町というプロセスの多様性、さらに地名をめぐると住民の認識の多様性を描き出すことにつながっている。こうした知見は都市社会地理学的な成果ともみなされる。

本論文は明晰な文章とともに、その実証的手続きが手堅いことも特徴的である。

日常という次元で地名の使用を検討するためには、資料をきめ細かく掘り起こし、読み込むことが求められる。新聞記事や行政報告書といった都市研究の常套的な資料に安住せず、コミュニティ誌の投書欄までをその検討の対象にするとともに、住民へのインタビューも量的に多いものではないが、一つひとつの発言から問いに関わるポイントをうまく引き出している。

実証的研究から得られた知見はいずれも説得的であるが、とくに注目されるのは、地名のもつ曖昧さを積極的に位置づけた点である。場所は行政領域のように明確な境界をもつことがむしろまれであることから、その地名もまた指示対象の空間的な範域については曖昧となることが多い。「千里」のまちづくりをめぐる、ニュータウンの住民、管轄する複数の自治体の担当者、さらにニュータウン外の専門家や関係者が、「千里」という地名に対してそれぞれ異なる意味を付与しながら、相互に排除することなく対話を可能にしていることを、結束という言葉で捉えているのは、まさに地名が場所をつくる可能性を明快に示していると言えよう。

申請者の慎重な態度は、自らの見解にしばしば留保をつける点に表れており、研究への真摯な態度とみなすこともできるが、議論を通して学問が発展することを考えると、より明快に自説を示してゆくことは大切である。申請者自らが課題として言及する、言語学的な考察や、地理学の場所論へのフィードバックとあわせて今後の取り組みに期待したい。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認められる。また、令和5年2月2日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降